

## 上方における相撲絵に関する一考察

大久 保範子 (横浜美術大学)

本発表は、江戸時代後期、江戸と並ぶ三都勸進相撲の開催地であった大阪、および京都における相撲絵制作の様相と、その背景について考察するものである。現存する三都勸進相撲の記録と、江戸の相撲絵に関する研究成果をふまえ、三都間の様式交流、また制作・販売地との関係について、相撲絵の観点から明らかにすることを目的とする。

錦絵が創始され、似顔による相貌表現が広まった明和年間(1764-1772)以降、相撲絵は役者絵や武者絵等の影響を受けながら、次第に独自の様式を確立していった。相撲絵は、江戸での作例が大勢を占めるため、同時期に興行が行われた上方での作例や、双方の関連性についてはこれまで注目されてこなかった。しかしながら、発表者はこれまでの調査・研究を通じ、以下の理由から、相撲絵は制作が本格化した天明期(1781-1789)より、様式および制作に関して、上方との関わりの中で展開してきたのではないかと考えるに至った。

### ①上方における勝川派相撲絵の人気と様式交流

勝川春章(1726-1792)は、錦絵による相撲絵を継続的に制作した初の絵師であり、彼にはじまる勝川派は、以後約50年にわたり相撲絵の先導的な立場を保ち続けた。発表者は、一昨年の太田記念美術館の助成を受けた調査で、春章による現存最古の相撲絵が、天明元年の大阪場所を描いたものであると推定し、論文として発表した。この作品は、当時の大阪ではなし得なかった精細な錦絵によって描かれており、力士や行司の装束も実際の勸進相撲の様子と異なることから、大阪相撲の伝聞をもとに、江戸で制作されたと考えられる。また、相撲博物館には、天明期の春章とその弟子春好の写しと思われる合羽摺の相撲絵が13点確認される。合羽摺は上方で特徴的にみられる技法であることから、江戸で軌道に乗りはじめた相撲絵が、時をあまり隔てず上方においても複製される程の人気を博し、ほぼ同様の様式で享受されていたことがわかる。

### ②上方における勸進相撲の盛衰と相撲絵制作との関係

錦絵が主流であり、流派内での様式が踏襲され続けた江戸に対し、上方の相撲絵は、墨摺や合羽摺、錦絵といった多様な手法を用い、描き方も、上方独自の様式と江戸からの影響を相互に受けつつ展開していった。上方では、文化年間(1804-1818)頃には、江戸とほぼ同一の錦絵による相撲絵が制作されたが、以後その作例は極めて少なくなってゆく。減少の背景には、寛政期(1789-1801)以降、勸進相撲の中心が江戸に移行し、上方出身の花形力士の多くが主要な活躍の場を移してしまっただけでなく、それが要因の一つであろう。

以上の点から、上方における相撲絵は、三都勸進相撲の popularity が拮抗した天明期以降に発展を遂げ、その衰退もまた、当時の勸進相撲の動向と軌を一にするものだったようである。しかしながら、その展開を検証することで、浮世絵の様式形成、および制作における三都間の交流に、相撲絵が果たした役割の一端を明らかにしうるのではないかと考える。